

蝦夷の雄「アテルイ」の痕跡「清水寺・将軍塚」と永観堂「みかえり阿弥陀仏」を訪ねて
 京都東山の陽だまりハイク 2006.2.9.



京都 東山 将軍塚より 京都市街地全景 2006.2.9.



円山公園から見上げる東山 将軍塚周辺



京都の街の東を南北に連なる東山連峰



蝦夷の雄長 アテルイとモシの碑
 坂上田村麻呂の建立した清水寺にある



2月6日 「京都 東山三十六峰」の東山界限を歩きました。

発端はNHK 新日曜美術館の司会など活躍中のはなさんのエッセー「ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう」。

京都 東山山麓の永観堂は東山山麓 銀閣寺から南禅寺への散策路の途中にある静かな寺永観堂の項に

『 小走りで仏さまに歩み寄ると「フィット」と横を向く阿弥陀様の姿がありました。せっかく 会いにきたのに「フィット」はないでしょう。…… ぽかぽか心温まるゆたんぼのような仏さま… 』

かわいらしい仏さまの挿絵とともにこれだけ愛らしく親しみやすい文に出会うのは初めて。永観堂は学生時代に何度も歩き、秋の素晴らしい紅葉の印象はあるのですが、仏さま「みかえり阿弥陀仏」を拝観した記憶はなし。「是非とも出会いた」と。



mikaeri-amida

また この東山界限には東北のたたら探訪で知った蝦夷の雄「アテルイ」の検証碑が清水寺にありその背後東山・将軍塚はアテルイを討った坂上田村麻呂が眠るといふ。一度是非訪れたい場所。

「アテルイ」は教科書などでは「悪路王」・「鬼」とされていますが 東北人には今も強烈に愛され続けている。(京都に連れてこられたアテルイは坂上田村麻呂の助命嘆願むなしく河内で処刑。

坂上田村麻呂は建立した清水寺で国家守護と共に戦乱で散った将兵をも弔ったといふ。

そして 平安京造営の折、桓武天皇は京の安泰を祈って 平安京が一望できる東山將軍塚の頂上に塚を築き武將像に坂上田村麻呂の甲冑を着せて葬ったという。)

伝説 永観堂 見返りの阿弥陀さまの由来



東山連峰の山麓に建つ禅林寺永観堂 2006.2.9.

永観堂は東山連峰 第十六峰 若王子山の真下にあり、正しくは禅林寺といい創建は平安初期という。永観堂と呼ぶのは七世永観律師の名に由来するもので、本尊阿弥陀如来像は“見返り阿弥陀”と呼ばれ、その名のごとく、顔を左(向かって右)に曲げて後ろを振り返った姿の阿弥陀像である。この阿弥陀仏には次のような伝説がある。



平安の中頃、永保2年(1082年)、当時50歳の永観律師が本堂で阿弥陀像の周りを通りながら念仏を唱える行道念仏の行をしている時、阿弥陀如来(実は室町時代作)が壇からおりて永観と行動を共にした。永観は驚いて歩みを止めた。先行した阿弥陀如来はふりむいて「永観遅いぞ」と促された。その姿が、そのまま像になったと言われている。

永観の時代と本尊の作られた時とは大きなズレがある。信仰物語の面白い所以である。

また、永観は人々に念仏を勧め、また、禅林寺内に薬王院を設けて、病人救済などの慈善事業も盛んに行なった。永観は、今日の社会福祉活動の先駆者といえるであろう。

禅林寺を永観堂と呼ぶのは、この永観律師が住したことに由来する。なお、「永観堂」は普通「えいかんどう」と読むが、「永観」という僧の名は「ようかん」と読むのが正しいとされている。

セクシーな見返りに心の鈴がなってしまう 永観堂の見返りの阿弥陀さま



阿弥陀さまの存在をしっかりと感じたのは、阿弥陀堂にだいぶ近づいてからのことでした。

あれだ！小走りで仏さまに歩み寄ると、そこには「ブィッ」と横を向く阿弥陀さまの姿がありました。長い道のりをかけて、せっかく会いにきたのに「ブィッ」はないでしょう、阿弥陀さま……いつもはデーンと、大きな姿で直視しながら迎えてくださる仏さまとはまた違うグリーティング法に少し戸惑いながら、私は阿弥陀さまに近づいていきました。



阿弥陀さまの姿を様々な角度から堪能した私は、お寺を後にする前に、もう一度見返るその姿にうっとりする時間を作りました。軽い衣を身にまとい、やわらかい表情を浮かべる阿弥陀さまからにじみ出てくるパワーには、同じ境内で咲き乱れるもみじの生命力に似ているものを感じます。眺めているうちに、心がボカボカに溢る。

まるでゆたんぼのような存在の仏さまです。セクシーなゆたんぼか……それも少々問題ありですね。



はな著「ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう」 Eikando 永観堂より

蝦夷の雄「アテルイ」



古代東北は資源王国。この東北の資源をねらて 大和朝廷の蝦夷征伐が始まった。蝦夷たちが手にした蕨手刀は弧状にそり、切る刀への日本刀のルーツ。戦いに敗れた蝦夷の技術集団は俘囚となって、日本各地に散らばって、たたら製鉄・刀鍛冶の技術を日本全国に広めた。 出羽鍛冶・舞草鍛冶などの名が広く日本各地に残る



清水寺にあるアテルイ・モレの顕彰碑

「アテルイ」の実像を示す資料はほとんど残されていないが、アテルイ復権の運動が今も広がっている。

東北に通って「和鐵」について 歩いているうちに「日高見の鬼」と呼ばれる蝦夷の族長「アテルイ」に東北の人たちが親しみを込め、熱っぽく語るその人物像ならびに「アテルイ」への強い連帯にビツクリ。

アテルイの生涯と蝦夷の戦いを熱っぽく描いた盛岡在住の高橋克彦氏の小説「火怨」があり、東北人の思いを込めたアニメ映画「アテルイ」の原案であり、東北人で語られてきた「蝦夷観」 「田村麻呂と蝦夷との交流」ほか当時の東北の事情が良く描かれている。

蝦夷の雄「阿弖流為・アテルイ」と征夷大將軍 坂上田村麻呂

8世紀末頃まで、東北北上川流域を日高見国といい、大和朝廷の勢力圏外にあり、独自の生活と文化を形成していた。当時 大和朝廷は服属しない東北の民を蝦夷と呼び、蔑視してその計略のため数次にわたり、巨万の征夷軍を動員した。胆沢（岩手県水沢市地方）の族長「アテルイ」は近隣の部族を連合して 10 数年にわたりこの侵略を頑強に阻止した。中でも789年の巢伏の戦いでは勇猛果敢に奮闘して征夷軍に壊滅的な打撃を与え、蝦夷の英雄と称された。

征夷大將軍となって東北に赴いた坂上田村麻呂は和戦量戦略を用いつつ、801年 数万の将兵を動員してアテルイを打ち破り、ここに蝦夷攻撃は終り東北経営の拠点として胆沢城が築かれた。

「アテルイ」は十数年に及ぶ激戦に疲弊した郷を憂慮して、盟友「モレ」と同胞500余名と共に降伏し、田村麿に従って平安京に上った。田村麻呂は蝦夷の両雄の武勇と器量を惜しみ、東北経営に登用すべく朝廷に助命嘆願したが、公家たちに反対され、「アテルイ」「モレ」の両雄は802年に河内の国で処刑された。田村麻呂は深く帰依し寺の造営につくしたゆかりの「清水寺」でこの二人や敵味方の将兵の霊にその誠を呈して祈念を重ねたという。

また、清水寺の後には京都東山連邦が連なり、その中央部のなだらかな山の上に「將軍塚」がある。

將軍塚からは京都全体が一望でき、桓武天皇が平安京造営を決断した場所といわれる。

そして、長く都を護る祈りを込めて土の武將像・坂上田村麻呂を作り、その甲冑を着せ、鉄の弓矢・太刀を持たせてここに埋めたといわれ「將軍塚」の名がついた。山の中央部にその古い円形の將軍塚があり、また頂上部の大日堂にはこの山から出土した平安初期の大日如来石像が祭られている。

一番最初にアテルイの名が出てくる「続日本書紀」では「賊帥夷阿弖流為 賊の大將 蝦夷のアテルイ」となっているのが後の編纂になるや「類聚国史」や「日本紀略」では「夷大墓公阿弖流為」と「公」という姓を与えられ、蝦夷の統率者として遇されており、その人物像には多くのなぞが残されていて、かつ 魅力的な人物である。

一般歴史では「悪路王」と呼ばれ、田村麻呂の影で悪者とされてきた「アテルイ」であるが、東北では自分たちのオリジンとしての連帯の中「坂上田村麻呂を信じ、更なる騒乱による犠牲と荒廃をさけて自ら投降し、平和共存を願うアテルイ」と広くを愛してきた。そして、平成6年にアテルイの復権に賭けた人たちの熱い運動で、田村麻呂ゆかりの京都清水寺の境内に「アテルイ・モレ」の顕彰碑が建てられた。

岩手県北上市の市民憲章より

「あの高嶺 鬼住む誇り その瀬音 久遠の讃歌

この台地 燃えたついのち ここは北上」

岩手県民総参加製作の長編アニメ映画「アテルイ」のメッセージより

「アテルイは親・兄弟を愛し、美しい自然を愛すために生きた。

21世紀の人間がどう生きるかという大切なメッセージがある」

参考 「和鉄の道 Iron Road たたら遺跡探訪【 】」 6.蝦夷の鉄 東北 和鉄の道

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron06.pdf>

1. 清水寺から將軍塚へ東山をハイキング

1.1. 清水の舞台から蝦夷の雄 アテルイ・モレの顕彰碑へ

2月9日朝 晴れ 京都駅から東山通りを走るバスに乗って清水道で降りる。東大路通りから直角にまっ直ぐ東に緩やかな坂道清水道をぶらぶらまわりを眺めながら上ってゆく。この坂道登るのは何十年ぶりかである。10分ほど上ったところで、五条坂から茶碗坂が合わさって清水坂。このあたりからは、立ち並ぶみやげ物屋の街筋のむこうに朱塗りの山門が見え、バスでやってきた修学旅行の学生でごった返している。みやげ物屋の街筋を抜けると ぱっと視界が開け 東山をバックに真っ赤な清水寺の山門と塔が見える。さほど登りとは感じませんでした。ここまで登ると京都の市街地が見晴らされ随分高い。



清水寺の参詣道 清水道 清水寺近く

清水寺の正面 山門

世界文化遺産 清水寺は「清水の舞台」で京都では最も人気の観光スポットのひとつである。

東山山麓境内の岩の間から清水寺の由来となった清水「音羽の滝」が湧き出し、この霊水と共に観音様が深く京都の人たちに信仰されてきた。しかし、観音信仰に深く帰依した坂上田村麻呂の尽力でこの清水寺が建立されまた 長きに渡った戦乱で倒れた将兵をとむらったことなどまったく知りませんでした。

そして、この清水寺の境内に坂上田村麻呂と戦った蝦夷の雄アテルイとモレの顕彰碑があるといい、背後に連なる東山三十六峰 知恩院上の華頂山山頂付近には坂上田村麻呂が葬られたという將軍塚があり、京都の街全体を見守っているという。

何度かこの清水寺近辺から東山を歩いた記憶はあるのですが、今はどうなっているか 全くわからず。まず、清水の舞台へ上がって アテルイの碑に出会ってから東山への道を探す。

拝観口で聞くとアテルイの碑は舞台の直ぐ下のところ そして 東山へ登る道は地主神社の所からしっかりついているという。



清水寺の舞台 2006.2.9.

清水寺の舞台からひとしきり京都の市街地を見て舞台の裏手に回りこむと北側に地主神社の鳥居が見え、鳥居の横に拝観口で聞いた東山への上り口の標識とよく整備された道が見える。清水寺から東山へ登る道がどうなっているか心配でしたがまったく心配なし。



清水寺の舞台から 京都市街地遠望 中央左に京都タワー 2006.2.9.



音羽の滝から 清水の舞台の下の遊歩道を舞台木組みを眺めながら 西へ 2006.2.9.

舞台の直ぐ横に沿って舞台を支える木組みを見上げる階段があり、階段を降りたところが少し広場になっていて 石組みで作られた岩壁から湧水が3筋落ちている。ぼくの印象とは随分違う人工的によく整備された音羽の滝。

昔はここで 流れ落ちる水に打たれる人がいたりして、もっと素朴な場所だったのですが、観光ブームがすっかり景色を一辺していました。



音羽の滝



アテルイ・モレの顕彰碑

こんなところに顕彰碑が建立されていたのか・・・

この谷沿いの道は何度も通ったことがある谷と京都市街を見晴らす静かな場所である。

1994年11月 平安建都1200年を記念して関西岩手県人会やアテルイを顕彰する会などの人たちによって建てられた自然石の立派な顕彰碑である。

音羽の滝のところから西へ紅葉谷の縁に沿って、清水の舞台の木組みを見上げながら西の山門の方に遊歩道が続いていて、清水の舞台の下を通り抜けたところに大きな自然石の碑が木々の間から見え、これが蝦夷の雄「アテルイ」と「モレ」の顕彰碑だった。



清水寺 南の谷に面する清水の舞台下の丘にある アテルイ・モレの顕彰碑

顕彰碑の横に置かれた銘文には アテルイ・モレを愛した東北人の熱い思いがそのまま刻まれていて、以前東北を歩いて感じた「アテルイ」「モレ」の人物像を重ねていました。

阿弔流為 母禮 の顕彰碑に刻まれた銘文

8世紀末頃まで、東北北上川流域を日高見国といい、大和政府の勢力圏外にあり、独自の生活と文化を形成していた。当時 大和政府は服属しない東北の民を蝦夷と呼び、蔑視し、その計略のため数次にわたり、巨万の征夷軍を動員した。胆沢（岩手県水沢市地方）の首領大墓公阿弔流為「アテルイ」は近隣の部族を連合して 10 数年にわたりこの侵略を頑強に阻止した。中でも789年の巢伏の戦いでは勇猛果敢に奮闘して征夷軍に壊滅的な打撃を与えた。801年 坂上田村麻呂は四万の将兵を動員して戦地に赴き、帰順策により胆沢に進出し胆沢城を築いた。阿弔流為は十数年に及ぶ激戦に疲弊した郷民を憂慮し、同胞五百余名を従えて、田村麻呂の軍門に降った。田村麻呂將軍は阿弔流為と副将磐具公母禮「モレ」を伴い京都に帰還し、蝦夷の両雄の武勇と器量を惜しみ、東北経営に登用すべく政府に助命嘆願した。しかし、公家たちの反対により弔流為 母禮は 802年 8月 13日河内国で処刑された。

平安建都 1200年に当たり、田村麻呂の悲願空しく異郷の地で散った阿弔流為 母禮の顕彰碑を清水寺の格別の厚意により田村麻呂開基の同寺境内に建立す。

両雄もつて冥さるべし。

1994年 11月 吉祥日

関西胆江同郷会 アテルイを顕彰する会

関西岩手賢人会 京都岩手賢人会

1.2. 清水寺から東山を登って坂上田村麻呂の將軍塚へ



清水寺から將軍塚・大日堂への登り口 2006.23.9.

地主神社の上り口には道標があり、將軍塚まで10町 知恩院まで17町など東山山麓への道のりが記されている。直ぐに清水寺寺域を出る橋を渡ったところで、そのまま真っ直ぐ山麓沿いを円山公園の方へ行く道から分かれて東へ山へ登ってゆく。清水寺の喧騒がうそのようなまったく人影のない静かな林の中。山道であるが、足元は落ち葉のじゅうたんでサクサクサクと心地良く、良く手入れされた林が美しい。



清水寺から將軍塚へ東山へ登ってゆく森の中の道

誰もいない林の中にもひっそりと清水寺と將軍塚の古い道標があり、また、この美しい林が神社建築に必要な桧皮の試験採取地であるとの案内板がある。おそらくは古くから清水寺から東山華頂山頂上の將軍塚・大日如来への参詣の古道なのだろう。

東山將軍塚へは五条とおりから北へ東山ドライブウェイが通じているので、山道などもう荒れていると思っていましたが、ハイキング道としてよく整備されているのにビックリ。



桧皮採取試験地を示す案内板



東山を貫く京都一周トレイル 東山コースの案内板

今回 東山を歩くまで良く知らなかったのですが、京都市街地を取り巻く東山・北山・西山をぐるりと巡る京都一周トレイルがハイキングコースとして整備され、京都の市街地のどこからでもこのトレイルを出入りして歩けるようになっている。清水寺から約15分ほどで東山の縦走路 京都一周トレイル東山コースに出た。この道は五条通渋谷街道から將軍塚を通過、蹴上げ・鹿ヶ谷・大文字山から比叡山へと続いていて、ここからは將軍塚までこのトレイルを歩く。15分ほどで將軍塚の頂上部の広い頂上公園 東山ドライブウェイの終点の駐車場に飛び出た。駐車場の北の山並みの奥に雪をかぶった比叡山が見える。

將軍塚は東山ドライブウェイからしか簡単には行けず、しかも路線バスがないので 車でないと行きにくい所と思っていましたが、京都市街地から30分ちょっとで將軍塚の頂上。本当に以外でした。



京都トレイル 東山コース 將軍塚への道で

將軍塚の駐車場から見る比叡山

公園の端に將軍塚の案内板があり、この地が昔から眼下に京都盆地全体を見下ろせる場所で桓武天皇が平安京建都の際にも この頂上に立ち、建都を決意したという。

また、將軍塚はこの広い山頂部の北半分を占める青蓮院門跡大日堂の寺域の中にあると書かれている。



將軍塚の案内板と大日堂の門 2006.2.9.

大日堂のお堂には將軍塚の「大日さん」として広く京都の人たちに信仰されてきた平安時代初期の古い大きな石仏大日如来が祭られていた。この仏様はこの將軍塚の山から出てきたという。

私はまったく知りませんでした。そういえば 登る途中の道標に「將軍塚」と並んで「大日如来」と書かれていて、道標に地名ではなく不思議に思っていました。京都の街で広く信仰されていた証拠。

この大日堂の周囲は広い庭園となっていて、北から北西斜面がぐるりと京都市街を眺める展望書になっていて、その手前の頂上部に周囲を石で囲まれた直径約 20 メートルほどの円形の塚があり、これが將軍塚。桓武天皇が平安京の安泰を願って 2.5 メートルの武者像に坂上田村麻呂の甲冑を着せ太刀と弓矢を持たせてここに埋めたとの伝承の塚である。

將軍塚の背後には眼下にはなにもさえぎるものもなく、京都市街は全体がパノラマのように広がり、本当に素晴らしい位置にある。



大日堂とその寺域の中にある將軍塚 2006. 2. 9.

1.3. 将軍塚からの京都展望

将軍塚は平安京建都の昔から京都市街地全体を見下ろせる素晴らしい場所で、また今も京都の夜景を楽しむ最も良い場所として有名である。(でも 車でないと行けないことから、若いカップルのデートスポットとして夏の夜は一杯だとか・・・)

将軍塚の展望台は座って京都を見下ろせるよう栈敷のようになっていて、あっけにとられて学生時代生活した空間を目で追いながら京都の街を眺めていました。

南に京都タワーぼんやり修復中の東本願寺も見え 中心部に御所・二条城・下鴨神社の緑の森が点在し、すぐ下には 神楽岡・吉田山 遠く加茂川の向こうに双丘が市街地の中に浮いている。そして それら市街地の中心軸を南北に加茂川が貫き、北の上加茂・松ヶ崎 そして比叡山へとつづく。

ここからは市街地を取り囲む京都五山の送り火床がすべて見え、その背後の比叡山 鞍馬・北山 愛宕山・西山そして南西の天王山・ホンポン山の北攝連山と生駒山・八幡の山の切れ目から淀川が大阪へ そして南には淀・伏見の市街地が切れ目なく続く。



京都 東山 将軍塚より 京都市街地全景 2006. 2. 9.



京都市街地を貫く加茂川 右手中央出町で鴨川 高野川に分かれる
中央左 御所 中央奥 舟形・右松ヶ崎妙法五山の火床が見える



京大・・・神楽が丘から松ヶ崎遠望



銀閣寺・修学院・比叡山遠望



京都駅周辺から北攝の山並み遠望

聞いてはいましたが、今見る京都全体の展望 特に加茂川を中心軸として町全体が見渡せる場所はこの將軍塚しかなく、正面の御所 そして左右に広がる京都の街、自分か街の中心の高台に立ち街を指揮しているような錯覚に陥る。

桓武天皇もこの地に立って そんな感覚をあげたのではないだろうか・・・。
そして 眼下に広がる平安京の守護を坂上田村麻呂の霊に託したのではないだろうか

坂上田村麻呂は武人であるばかりでなく、清水寺建立にかかわった宗教人でもあった。

そして 坂上田村麻呂のアテルイ助命嘆願の歴史書記述がほとんど人物像の記録がない蝦夷の族長アテルイ人物像を浮かび上がらせた。そうでないとアテルイも「悪路王」として悪者としてしか記述されず、東北の人たちが共感する人物像が浮かび上がらなかつただろう。

坂上田村麻呂は単に策略を弄した武人ではない優れた大人物 彼とアテルイの交流がなければ東北の長きに渡る混乱は収まらなかつただろう。

そんな功績が將軍塚として京都に残り、また アテルイに強い近親感を持つ東北秋田にも將軍野や將軍通といった地名として残っている。

一度登って ゆっくり京都の街をみたかつた將軍塚 アテルイの顕彰碑に書かれた碑文などを思い起こしながらそんなことを考えていました。

30分ほどすわりこんで、眼下の京都を眺めた後、大日堂山門前に咲く椿をくぐって そのまま東山を北へ向かって、静かな林の中のトレイルをぶらぶら歩いて粟田口に降りる。

サクサクと落ち葉のじゅうたんが本当に気持ちがいい。



大日堂入り口周辺の椿



將軍塚から北へ 静かな林の中のトレイルが続く

2006.2.9.

30分ほどで平安神宮の赤い鳥居が見え出すとまもなく栗田口の市街地に降りる。

トレイルはそのまま山裾を蹴上に出て東山を鹿ヶ谷・大文字山を経て比叡山へと続くが、栗田口から今歩いてきた東山を眺めながら山裾を知恩院・円山公園の方へ引き返す。この山裾の栗田口からの道もお寺が立ち並んで静かな散策が出来る。

將軍塚の大日堂を所有する青蓮院門跡をすぎると知恩院の大きな山門。山門に大きな「華頂山」の額がかかっている。その背後になだらかなお椀形の山が見えるのが、先ほど上ってきた將軍塚のある華頂山。円山公園 八坂神社の門をくぐると祇園石段下。

清水寺から約3時間弱 あっというまに また市街地に戻ってこんなに簡単に東山を歩けるなんて思いもよらなかったと振り返りながら遅い昼食。



円山公園から見た東山 華頂山周辺

念願のアテルイの碑にも会え、田村麻呂の將軍塚からほんと天下を取ったような気分で京都も見下ろせ、満足のハイクでした。

京都の街中の散策もいいですが、お勧めの東山ハイクです。

昼食後 今度は 平安神宮の東 東山若王子山の山麓 永観堂の見返りあみだ様に会いに行く。



栗田口から知恩院・祇園石段下へ
上段: 神宮道 栗田神社 白川小 校門 青蓮院
中絶: 円山公園から東山 知恩院山門
下段: 八坂神社石段下 祇園・四条通

昼食後 今度は 平安神宮の東 東山若王子山の山麓 永観堂の見返りあみだ様に会いに行く。

2. 永観堂 みかえり阿弥陀さま 東山 若王子三山麓

2月9日 午後

「ブイッと横向く阿弥陀さま」

「ぼかぼかと心温まるゆたんぽのような仏さま」

(はな著「ちいさいぶつぞう おおきいぶつぞう」より)

に胸膨らませて出会いに行きました。

午前中に歩いた東山 將軍塚をさらに北に連なる峰若王子山の山裾 ちょうど平安神宮の東、銀閣寺から法然院を抜けて南禅寺に抜ける白川疎水沿いの散策路のほぼ中間 学生時代によく歩いた界限である。市内から市バスに乗って東天王町の角で降りて東山へ。昔秋紅葉の頃には永観堂と書いた丸いプレートをつけた市電が直角に曲がるコーナーである。幾度か訪れた東洋陶器の住友大コレクションのある泉屋博古館・芳泉堂のところから南へ曲がって少し行ったところが永観堂。そのまままっすぐ南へ行くと南禅寺・蹴上への道である。道筋は昔のままで、直ぐ学生時代に戻ってしまう。でも 建物の様子は随分変わっているようだ。

神戸住吉にあった住友資料館が博古館の向かいに来ていました。

10分ほどで、永観堂の前に出る。このあたりはちょうど観光スポットの狭間で、紅葉の季節を除いては今も静かなものである。



永観堂界限と永観堂の山門 2006.2.9.



みかえり阿弥陀如来

永観堂の山門

みかえり阿弥陀仏の写真が貼られた中の門

「きれいな土塀があったかなぁ」と歩くと山門前 「みかえり阿弥陀如来」の大きな石碑がある。

随分 印象が違う。 わたしの学生の頃はどこからでも寺域の庭の中に入れて、庭には大きなショウギが置かれていて、横の茶店でお茶が飲め、山内の建物を巡ってあちこち自由に歩けたのですが・・・。

拝観口で拝観料を払って 白砂の敷かれた境内の中、東山をバツクに奥の高台に塔が見え その前の建物 庭をみると良く手入れされているが、頭の中にあるイメージといっしょでほっとする。

でも 「みかえりの阿弥陀さま」まったく記憶なし。



永観堂の境内 2006.2.9. 本堂に並んで一番北の奥に塔 南の奥高台に修復中の阿弥陀堂（写真中央）

すぐに本堂に上がって中を拝観する。 はなさんの本にも書かれていましたが、中々阿弥陀さまに近づけない。 釈迦堂から渡り廊下を渡って御影堂をから 渡り廊下をまたわたって奥へ奥へ。 国宝・重文の仏像・障壁画・襖絵が順路に沿って見られるのですが、今日はやっぱり「みかえり阿弥陀さま」。 多宝塔がきれいに見える渡り廊下を渡って、すこしめぐったところが、阿弥陀堂。 建物は修復中でしたが、暗いお堂の正面 黒いお厨子の中に阿弥陀さま。 真っ暗な周囲の中に横向きの阿弥陀さまの立ち姿がありました。 一躯像高 77cm 平安後期～鎌倉初期の作。「みかえり阿弥陀」として知られる永観堂禅林寺の本尊像である。 左肩越しに振り返り、「永観、おそし」と声をかけられた。 そのお姿がぼっと浮かんで素晴らしい。 正面から横にまわると厨子に取り付けられた窓から、真っ暗な中からじっとこちらを見つめる顔に立ちすくんでしまいました。 永観堂のシートに書かれた言葉が静かに心にしみてくる。



「みかえり阿弥陀如来」のお姿を現代風に解釈すると、次のようになろう。

自分よりおくれる者たちを待つ姿勢。

自分自身の位置をかえりみる姿勢。

愛や情けをかける姿勢。

思いやり深く周囲をみつめる姿勢。

衆生とともに正しく前へ進むためのリーダーの把握のふりむき。

真正面からおびたしい人々の心を濃く受けとめても、

なお正面にまわれない人びとのことを案じて、

横をみかえらずにはいられない阿弥陀仏のみ心。

永観堂ホームページより

<http://www.eikando.or.jp/mikaeriamida.htm>



拝観の前に茨木キリシタンの郷「千提寺」の「マリア 15 玄義図」を見たこともあって、イタリア旅行で見たテイツァーノの「聖母被昇天」の絵やアッシジの聖フランシスの一生を描いた壁画をダブらせていました

イタリア旅行で見た「マリア被昇天」・アッシジ「聖フランシス」と「みかえり阿弥陀如来」

気になって仕方なかった「みかえり阿弥陀さま」本当に拝観できてよかった。

やわらかいひざしの中 静かな境内を戻りながら満足感でいっぱいでした。

2006.2.9.夕